

歴史点描 20 網干沖にて御用銅船座礁 1

弘化4年(1847)未年12月9日、まだ夜が明けやらぬというのに濱田から知らせが届いた。息せき切って駆け込んできたのは^{あるきやく}歩行役の嘉八郎だ、村の伝達事項を各家々に触れ廻る歩行役は、村の費用で賄われ普段は農作業に従事しつつ村政の一端を担っていたため、村内のみならず(村継ぎ・村送り)など信頼のおける人物が選ばれていた。網干地区では古文書から、興浜の桑蔵・大江嶋の茂右衛門・余子浜と垣内・新在家などそれぞれ歩行役が確認でき、なかでも大江嶋の旧家茂右衛門家は今も健在だ。

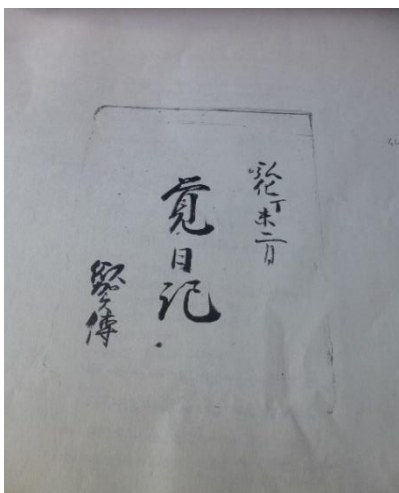
嘉八郎は「御用銅積船が夜前(昨夜)から動く気配もなく川尻にとどまっているようですが、そちらはお気付きですか」と興浜の船役所に注進してきた。興浜と濱田は揖保川河口兩岸に向き合う村だから対岸の様子は手に取るように分かるのだが。興浜側ではどうやら気付いていなかったらしい。そこで早速船役所が聞き取りに動いた。

船は防州(山口県東南部)^{にしゅうら}西浦の^{わだつ}和達丸で船主兼船頭の名は寅吉、いわゆる^{じきのり}直乗船頭だ。未明にもかかわらず興浜の「いた新(板屋新兵衛力)」に瀬取船を頼み込む。瀬取船というのは、沖で船から船へ荷物を移動するときに使われる船で、河川交通が盛んだった網干全域において数多くの瀬取船主が活躍、なかでも四国丸亀藩の統治下にあった興浜では、沖で待機する大船に藩の御用米を積み込むために欠かせない存在であった。

克明な記録を残し引き継いできた興浜の水田家文書には、丸亀藩網干陣屋の研究に欠かせない有用な未知の資料が温存されている。

網干歴史講座

田中早春



姫路市史編集室所蔵文書



対岸は濱田村、今も船が舫う着岸地